

埼玉県の腸管出血性大腸菌検出状況 (2004)

2004年に埼玉県で分離され衛生研究所で確認された腸管出血性大腸菌は、78株です。血清型はO157が最も多く、O157:H7が57株(73.1%)、O157:H - が7株 (9.0%)、次いでO26:H11が12株(15.4%)、O111:H - が1株(1.3%)でした(表-1)。また、市販血清で型別できない血清型が分離され、国立感染症研究所での同定の結果O103 :HUTと型別されました。また、8月中旬に発症し、その際の検便でO26:H11 (VT1)が分離され、その後の回復検便でO157:H7 (VT1&2)が分離された例がありました。分離された78株のうち17株は患者発生に伴う家族検便や、給食従事者に対する定期検便で検出されたものでした。

表-1 分離された腸管出血性大腸菌の血清型と毒素型(2004)

血清型	毒素型	検出数
O157:H7	VT1&2	36
O157:H7	VT2	21
O157:H -	VT1&2	6
O157:H -	VT2	1
O26:H11	VT1&2	1
O26:H11	VT1	10
O26:H11	VT2	1
O111:H -	VT1&2	1
O103 :HUT	VT1	1
合計		78

衛生研究所では、分離株数の多いO157:H7についてはすべての株を、その他の血清型については必要に応じて PFGE法を用いたDNA切断パターンによる型別を行っています。現在までに型別が終了しているO157:H7 (VT1&2産生)36株が18パターン、O157:H7 (VT2産生)21株が19パターンと多様なパターンを示しました。O157:H7 (VT1&2産生)ではいくつかの散発事例が同一のDNA切断パターンを示しましたが、明らかな共通食品等の原因を突き止めるまでには至りませんでした。

今後とも原因究明調査等へのご協力をお願いします。